五回叩くと開くのが、最初の一回で開いてしまい、逃げ遅れて石の下敷きになり、又もや入院。二週間ほどで退院、原隊に復帰する。

昭和二十二年二月二〇八収容所に道下隊は転属され、ここでも鉄道建設作業に従事、隊長としての一日の睡眠時間は約四時間位、疲労が重なり身体はやせる一方で骨と皮。入営当時の七十二キロは見る影もない（おそらく四十五キロ位と思われる）。

ある日、鉄道建設作業現場にソ連の軍医が来て、全員裸にさせ、ふんどし一枚で一列横隊に並ばされた。軍医が一人一人の前で、胸をさすったり尻の皮をつまんで五十人のうち四名を選び出した。私もその四名のうちの一人である。（お前は使いものにならない）

ソ連は昭和二十二年八月この四名を二一八収容所に移動し、帰国要員を集結させ、約一か月薪集め、宿舎の清掃等の軽作業に従事させ、若干体力を回復させて、昭和二十二年九月十二日ナホトカから舞鶴に上陸復員させたのである。

私の青春時代の六カ年

島根県　玉木文明

一、入隊までの二年

兄は一歳の時に他界していたので、私は次男ではあったが、代々農家である我が家の跡継ぎとして、旧制松江農林学校に通学した。時代は大東亜戦争の総動員令下のため三か月の繰り上げ卒業式で、それは昭和十七年十二月二十三日であった。軍事教練、山地開墾、勤労奉仕や農場実習の科目が多く、教科書の多くは開かない頁が多く残ったままの記憶がある。

昭和十二年、当時六年生だった時代から日中戦争以降の相次ぐ徴兵徴用や勤労動員のために、銃後と云われた農村も年々手間不足に加え肥料等の農業資材の不足が深刻になっていた。そこへ食糧増産の至上命令によるお米の強制割当て供出が次第に厳しく大変な時代を迎えていた。

当時父は、大政翼賛壮年団員、食糧増産班長等の諸役を任命されて部落巡りのために日夜駆け回り、家を留守にすることが多かった。

そのため八人目の弟を産んだ母は、祖父母がいなかったことがあって家事子育てのほか野良仕事に毎日休むことなく立ち働いていた姿を思い出す。その上、明治三十五年の五黄の寅年生まれとかで、出征兵士に贈る武運長久の千人針の依頼が多く、夜遅くまで縫い上げていたことを記憶している。

我が家のかような苦難の解消策として私は在学中に、当時農業先進地の能義平野の学友宅より当歳馬を購入、農耕馬に調教、卒業後の営農改善に役立てる決意を実行に移しつつあった。今は亡いが、当時父母たちも喜んでくれた。

しかし、私の卒業後最初に届いたものは炭鉱への報国勤労動員の令状だった。昭和十八年二月より福岡県遠賀郡水巻町の日炭高松炭鉱での製鉄用無煙炭の構内採掘作業である。

小数の保安要員以外の先山の多数は半島（当時朝鮮は禁句）出身者で、彼らの操作するドリルやピックでこわしたボタ混りの石炭を、大型シャベルで回転するコンベヤーに投げ込む三交代の重労働で初めての苦しい体験をさせられた。

地下深い暗黒の坑内は高温で下着一枚、炭塵ガス、落盤事故の危険な悪環境の中で増産また増産の毎日で、全身真っ黒く目だけが異状に光る出坑時の姿であった。時たま担架ではこび出される負傷者を見るたびに時代の緊迫感を新たにした青春の初試練でもあったと思う。

その時にもらった日給は五円。坑外作業は二円五十銭だった。売店は梅干しや鯨缶ぐらいしか買う物も少なく、ほとんど貯金したままであった。下山時に、勤労報国奉仕作業に対して感謝状を頂いた。

やがて春を迎え、父母たちの待つ我が家に帰ったものの、炭坑労働のため健康を損ねて体調も崩したままであった。農繁期作業では期待通りのことはできなかったが、社会人一年生のことゆえに父母たちに大変喜んでもらった春でもあった。

春の農作業も終わると今度は県主催の皇道教育県民

道場へ参加練成である。私どもの村からも同年代の数人が参加した。ちょうど盛夏のころで道場教育は、早朝の東方遥拝、勅語勅諭の朗読から精神講話、パンツ一枚の体操、駆け足と連日連夜の厳しい訓練を受けた。必勝のために大和魂の振興、質実剛健の心身養成の教育過程は当時の世相そのものであった。

自分にとっては炭坑奉仕で傷ついた体の焼入れとでも解釈して納得した練成であったと思う。その道場の末期、九月十九日〜二十日に山陰石見地方を中心に大風水害の未曾有の惨害が襲った。死者四百名以上、江津レイヨン工場構内の道場も被害をうけて練成は取りやめ、解散帰宅となった。

同郷方面の参加者と早朝に出発したが、国道は全面通行不能のため山陰本線の沿線を徒歩での難行程であった。途中のすべての谷間は大山津波により線路床は流され鉄路は宙吊りとなり、数メートル高い電線には流下物が垂れ下がり、田畑の作物は流されて悲惨な状態であった。

各家々では総出で内外の後片付けをしているのを見ながら一刻も早く我が家に帰り、皆の安全を確かめたいと八十キロもの長い道程を歩き続けて帰宅することができた。そしてお互いの健在を喜び合ったものである。

おかげ様で初年目の秋の収穫のときも精一杯働くことができた。刈取りあとの水田も馬耕畦立て、小麦の作付け割当目標が達成でき皆喜んだ。その上に依頼された他の耕作までして初めて収入を得たことも大きな喜びだった。

翌十九年三月には日本馬事会主催の食糧増産馬耕指導員練成実務講習会が岡山県児島湾干拓地で、当時日本一大型農場で有名だった藤田村の藤田農場において開催され、県下より数名参加したうちの一人に加えていただいた。

軍用馬の増産と馬耕技術の研修が主目的で、短期間の合宿訓練であったが有意義な参加であった。娘さんたちの参加者もかなりいた。帰路の車窓に向かい合い彼女と口ずさんだ当時流行の琵琶湖哀歌（遠くかすむは彦根城、波に暮れゆく竹生島、何すすりなく浜千鳥

雄々しき姿よ今いずこ、ああ、青春の唄のこえ）私の青春の初恋の思いであるが、戦時下他郷の人ゆえにお互い手を振りながら清き別れだった。元気なれば、今ごろはよいおばあさんになっていることだろうとただ遠くより祈るばかりである。

かようにして愛馬も耕作作業に馴れ、卒業二年目の初の農作業も順調にできた。宍道湖岸の草原の開墾等依頼された作業までやり遂げて精一杯に懸命に頑張り抜いた青春。入隊までの二年足らずの自分史である。

二、繰上現役入隊から抑留入ソまでの一年

昔から先輩たちにより引き継がれてきた神代神楽の練習を青年団長だった自宅の離れ座敷で行うことになり、十九年秋の刈り入れの合間や夜間を利用して行っていた。やがてくる秋祭りに奉納するためである。私は祝詞の舞を古老から教わり舞う役目だった。しかし、練習を始めて数日後、練習中に私がもらったのはピンク色用紙の繰上現役召集の令状であった。いよいよ家族や折角の青年団連中とも別れ、お国のためにご奉公するときがきたわけである。

満十九歳三か月であった。私の小学の同窓生としては第一号の栄誉であったが、当時既に徴用や志願兵として多数の者が奉公の身であったので、私も当然のことと信じ切っていた。

十月三十日、家族や親戚、地区民多数の歓呼の旗波に見送られて藤原駅にて決意のお礼の挨拶をして広島へ出発した。小学六年生当時より数知れない多くの出征兵士を一里の砂利道を歩いて見送った私が、このたびは見送られる番となったわけである。もう一人の錦織先輩（抑留中死亡）と二人の門出であった。分厚いお守り袋、母たちのつくってくれた千人針の腹巻、日の丸の鉢巻き、教典類等の七つ道具も大切に持参、満四か年間を遠く故郷を離れることになった。

それ以来母は無事を祈って毎日陰膳をそなえ続けてくれたそうである。ひもじい目に逢わず無事生還を祈り続けた親の気持ちのありがたさを生還の時に聞き、涙して感謝の念を痛感した次第である。

集合地の広島西練兵場兵舎に無事入隊。真新しい二等兵の襟章のついた軍服、戦闘帽、帯剣、雑嚢姿の初

年兵として目的地満州へ旅立った。博多港―釜山港―我々を乗せた軍用列車は赤く実ったリンゴ畑の北朝鮮をさらに北へ、鴨緑江の鉄橋を渡るといよいよ目指す満州である。ハルビン市東方阿城駐留地の関東軍第一二一四部隊（阿城重砲二連隊）二中隊ろ隊（指揮班）に入隊した。千三百人くらいが同時入隊し、中国地区、島根県出身者も多数おり心強く感じた。

十月下旬の北満は冬を迎えた薄い雪化粧と記憶している。その当時の戦況は、本土の各都市にはB29の空襲が始まり、比島レイテでは学徒出陣の神風特攻隊の肉弾戦法による決死玉砕が報じられて、悲壮感が日増しにたかまっていた。本土決戦に備えて一億総動員令下、在郷軍人会や国防婦人会の竹槍訓練も真剣に始まっていた。また夜は燈火管制の訓練も続けられた。

入隊した「ろ隊」で我々は通信兵としての初年兵教育をうけた。

連隊の主砲二十四センチ榴弾砲の展開砲座と敵方着弾地点の適否を観測する観測班との間の通信連絡が任務である。そのための訓練は阿城の山野を電話ケーブルを背負い零下二十度雪原中を延線、通話、また撤収と反復駆け足等であった。

夕食後の内務班教育は回光機でのモールスの送受信と日夜連続の初年兵教育を懸命に頑張り通した。非常時のため三か月で第一期の検閲が終わった。

私は幹部候補生に選抜されて同僚数名とともに各部隊よりの集合教育に派遣参加させられた。上等兵～兵長の階級章を誇りに青春のすべてを打ち込んで教育を受け、不意に起こされる消灯下の非常呼集にもいつも早い順位だった。集合教育の結果、甲、乙に分けられて、私は幸運にも甲種幹部候補生になることができた。

そして昭和二十年七月二日、東満牡丹江市南方の石頭駐留地にある徳第一三九八一部隊に派遣転属を命ぜられた。この部隊は関東軍の予備士官学校として北鮮、北支を含む全満州各隊より三千六百名の甲種幹部候補生を集結、下級将校養成のための教育隊で我々は第十三期生とのことであった。

ろ隊から私が一人であった関係で、原隊に留まった同僚に申しわけないと複雑な思いを抱いての石頭行き

であった。あとで聞くと彼らも出陣、東満国境方面の琿春に陣地構築し、戦闘の末終戦を迎えたとのこと。あの巨大な二十四榴弾砲や戦友同僚の運命いかがばかりかと復員後の再会までいつも心していたことであり、同僚と別れた寂しさでもあった。

石頭教育隊では二中隊八区隊員として、広瀬見習士官区隊長のもと短期間ながら日夜にわたる熱烈な教育訓練に励んだ。

ドイツの降伏、南方戦況の悪化に伴い、教育方針も本来の幹部教育から、ソ連参戦の攻撃より南満州一体をいかにして守るかに教育方針も移行、侵入する敵戦車への体当たり、タコツボ戦法や挺身切り込み等の悲壮な肉弾戦法の実戦訓練を受ける日々が続いた。

八月九日夜半、ソ連軍が満州国内に各方面より一斉に侵入攻撃を開始した。日ソ中立条約を一方的に破っての戦争開始である。この時点を境にして在満邦人、開拓団や関東軍の苦難の歴史が始まったわけである。

部隊では候補生の原隊復帰の計画も不可能となり、すぐに戦闘態勢に改組編成された。奇数中隊は荒木連隊として、我々偶数の二中隊は小松連隊の所属となり、翌十日夜半を期して一斉に出陣した。

荒木連隊は牡丹江市東方の第一線の磨刀石方面に、我々の小松連隊は東京城方面に南下、敵の空挺部隊防御のための作戦命令であった。

何分にも入隊以来四十日、戦友の名前や見覚えもつけ難く、各機関銃や小銃くらいの軽装備等不慣れな戦闘出陣態勢に大変混迷したものの、来るべき時が到来したと悲壮な覚悟で暗闇下の徒歩出陣であった。

敵空挺部隊の降下もなく南下行軍中にソ連機の機銃掃射の下に食うや食わずの強行軍で病気落伍の犠牲者が多数出たことは苦しかったが、敵軍と直接戦闘を交えなかったことは小松連隊にとっては幸せであったと思う。

一方磨刀石方面に布陣した荒木連隊は十三、十四の両日間にわたり、戦車を先頭に侵入するソ連大部隊を攻撃し数百名の戦死者を出す激戦の末に退散したと聞く。岸壁の母の主人公、端野いせさんの一人息子新二さんが足に重傷を負ったのもこの激戦中と聞く（十三

期生の記録禎鑑より)。

八月中旬、熱気と降雨の悪天候下のぬかるみ道を鏡泊湖西岸沿いに苦難の南下行軍の末に沙河沿にたどりついた。途中アメリカ製の小型ジープ数十台に数人ずつ分乗したソ連兵が軍歌を歌いながら南下する姿を眺めたとき、誰言うとなく日本は敗けたと実感した。

二十一日、沙河沿飛行場に集結、終戦詔書の下達式がなされ、部隊全員の武装解除があった。場内の一角に十日間も難行軍をともにした小銃、軽機、刀剣類、弾薬類等をすべて山積みにした時は悲しさと絶望感で涙すら出なかった。

必勝を信じ、お国のために命を捧げて懸命に頑張り抜いてきた十か月間の訓練もこれで終わりかと思うと本当に悲しい極みである。出陣式の時に着た軍曹の襟章、候補生の金星のバッジつきの真新しかった軍服も汚れて敗戦の惨めさを改めて感じた。

後ほどに感ずることは、あのソ連軍の侵入を二日間も足止めした磨刀石での戦争犠牲のおかげで、北方黒龍江省方面の開拓団婦女子の南下避難を助長に導くことができたのである。本当に尊い人柱であったと戦死した戦友たちに改めて慰霊のまことを捧げる次第である。

武装解除後はソ連軍の監視下で、集結した各部隊混成の作業大隊に再編されて幕舎生活を強いられた。日本帰還までというソ連兵の監視のもと、一か月くらい貨物輸送等の使役が続いた。食糧事情も悪く軍規は乱れて混乱騒然の時代だった。

秋も深まった九月下旬、千名単位の作業大隊ごとに次の集合地牡丹江市方面への大行軍に参加させられ、マンドリン自動小銃を肩より吊した若いソ連兵にトーキョウダモイ、ヴィストレーダワイダワイと追い立てられて北への難行軍の末、一週間くらいで掖河集合地にたどり着いたと思う。

その道中、今も覚えていることは、日本人婦女子の見送り姿である。鏡泊湖東岸の城壁に囲まれた小さな街の沿道に男装軍服姿の布陣、ボロに汚れた服装姿の子供たちが数十名一団となり、北へ行軍する我々に手を振りながら「兵隊さん早く日本に帰って私たちを迎

えにきてください」と口々に叫んでくれた姿、あの婦女子たちはその後いかなる運命の道を歩んだことか、日本に帰ることができたであろうか、政府が行っている残留婦人や孤児の十数回に及ぶ訪日調査のたびごとに私は、いつもあの時手を振って別れた方々ではないかと涙して思い、これからの幸せをお祈りするばかりである。

夏から一足飛びに冬が到来する北満の十月初旬は、広い荒野の一面に続く枯れ果てたトウモロコシや高粱の残骸がいかにも寂しそうである。

「高粱枯れて　鳥なく
　赤き夕日の　国境
想えば悲し　武者が
荒野の露と　消え果てて
　今は寝るか　この丘に」

誰から覚えたか、こんな悲哀の歌の一節も思い出す五十年前の私がたどった青春時代である。

三、シベリア抑留、越冬の三年

八月二十一日、終戦の伝達、武装解除の地沙河沿の収容所より、東京ダモイの集合地牡丹江掖河収容所で乗車の順番待ちをすることとなった。

十月ともなると朝夕の寒気は厳しく身にこたえる。夏の軍装に雑嚢、飯盒、水筒、毛布一枚と編上靴が出陣以来のただ唯一の財産となる。

こんな姿の我々関東軍各部隊が数千人か数万人か、この一帯の収容地に集結させられてソ連の戦利品貨物の荷役の使役等に従事しながら待機した。積み込む大豆や高粱等が、まさか抑留中の我々の食糧になるとは夢にも思わなかったことである。

移動するたびごとに編成替えをさせられて、作業大隊千名の隊列にまた改組、十一月中旬いよいよ乗車する順番が到来する。父母、兄妹等の待つ内地は元気で稲刈りが終わったであろうか、飼っていた馬はどうしているか、アメリカ兵にやられてはいないだろうか、と希望と不安を抱いての乗車であった。

上下二段、三段に仕切った有蓋貨車は綏芬河のソ満国境を通過した。やがて誰となく車内が騒然としてきた。わずかな隙間より眺めた誰かが北へ向かっている

と言い出した。南方ではないと、やっぱりシベリア行きだ、殺されるのではないかと皆が深い悲哀に沈んだその時の気持ちを今でも思い出す。一方、望郷の念はますます募るばかりであった。

十一月末ころ、我々の作業大隊（二百六十名）を乗せた列車は、淋しい深い森林の続く雪の積もった停車地で下車させられた。そこはハバロフスク市の西北方で、イズベストコーワヤ地区である。停車した支線は南のシベリア鉄道と数百キロ北を走るバーアム鉄道を結ぶ地帯で、その沿線には多数の収容所が点在していた。

一般の住宅ではなく、丸太を積み上げ板で屋根構えの木造バラックで、四方の角には高い見張り台、周囲は鉄条網に囲まれた収容所である。我々の入る直前までドイツ兵の捕虜や政治犯等囚人の重労働の流刑地であったであろうとのことだった。

一棟のバラックに各一個のドラム缶を切り抜いた急ごしらえのストーブと通路を挟んで両側に並んで寝るような板敷の寝台だけで、昼間は小さな二重窓よりの明かりのみで薄暗く、夜は薪を燃やしたストーブの灯が唯一の頼みで「シラミ」つぶしの光でもあった。

抑留初年度冬の収容所はかような最悪の住環境に加えて、衣類は夏服、一枚の毛布（作業外出時は毛皮、外とうに防寒帽、大手袋、カートンキ（防寒長靴））、食物は生命維持がやっとの黒パンと雑穀入りスープ、労働するためのものではなかった。

ソ連軍の侵入以来の混乱下、まともな食事もとれず衰弱しきったうえに、入ソ後の厳寒と飢餓、加えてノルマ攻めの重労働に耐え難く、幾万人もの戦友が尊い生命を失ったのもほとんど初年目の冬である。

二年目、三年目ともなるとソ連の国内事情も好転したためか、我々の衣食住環境がよくなり逃亡者や病弱者が少なく帰国、復員することにつながった。

抑留中の三年間、我々のたどった主な足跡は、

(1)伐採、運搬、集積、製材工場、建築等

身体検査の結果、私は伐採作業班に編入された。林道のない伐採地は冬期谷川の凍結上が唯一の搬出路となるために、その期間が伐採期となる。八時間労働の

バラック出発ではあるが、冬期のシベリアでは朝は朝星、帰りは夜星を眺めての暗がりの中での出入りである。

五列縦隊の人員点検に内務省所管の銃を持ったカンボーイは計算に手間取り迷惑したものである。二人一組で一・五メートル位の両柄の鋸とタポールと称する斧二丁を受取り伐採の現場へ。十月ころに積もった三十センチぐらいの雪が根雪となって四月ごろまで残る。その間はほとんど青空の乾燥しきった大陸性気候である。

伐採山地の樹種は赤樅、黒樅、五葉の松、カラ松、白樺である。白樺はすべて薪材で、ほかは枕木材、建築材で六メートルか六・五メートルの丸太に切断しながら各組が間を置きつつ順次に奥地へと切り進む。太い樹幹の場合は一本で四本の丸太がとれるくらいに竹林状の樹海が広がっていた。

作業で困ることは、ノルマの重さと枝打ちの正確さと、その枝を全て跡形もなく焼却せねばならぬことである。零下三十度、生の凍った枝はなかなか燃えず、ノルマの検尺係に小言を言われたものである。

元口に検尺印のあるものから搬出作業班は引き出していく。満州より持ち込んだと思われる馬ゾリに一～五本の丸太の元口を乗せてチェーンで絡み、川沿いの工場に引きおろし一段一段輪木を敷いて積み上げて置く。そこから製材工場の貯木場までは新しいアメリカ製の（援助物資と思う）大型トレーラーに満載、氷結した川床を下るのである。

積み込み作業や荷下ろし作業もやったがなかなか危険な重労働で、厳寒下、大手袋に厚い毛皮の外とう、滑る足を踏みとどめて長い鉄棒を使ったものである。零下四十度くらいになると防寒帽の縁は息で真っ白く、お互いに鼻の先など凍傷に注意し合ったことを思い出す。

谷川の凍結もとけて、四、五月ころ伐採搬出が終わると、主力は製材工場や貨車積み込みの三交代作業に、一部は湿地帯の草刈り、干草つくりや（この干草は主に作業馬の飼料）コルホーズ作業に振り当てられる。

冬期と反対に朝の三時ごろより夜の十時ごろまで明

るい工場で夜勤も苦しかった。夜、空腹での作業の合間に星空を眺めて（間近見る北極星ではなかったか）口ずさんだ、「千里離れようと思うは一つ、同じ夜空の月を見る。船頭可愛いや」の歌を声を張り上げて望郷の思いを発散させたものである。

製材工場ではオガ屑や薪を燃料に蒸気機関で発電機を回しており、ソ連人監督や家族の風呂場があった。そこで時たま見受けた若いソ連の婦人たちにも我々は無表情で、それよりもお互いの故郷自慢の御馳走話の方が関心事でなさけない青春だった。

また短期間舎屋の建築の手伝いにも出役した。豊富にある丸太の皮と両面を落とした六・五メートルの太鼓型の一方を手斧でえぐり取り、そこに水ごけを挟んで四角に積み上げ、屋根は分厚くひいた長い板を急勾配に重ね敷く工法である。現在日本の山地キャンプ場等にあのやり方のバンガローを見受けることがある。

(2)シベリアで得た栄養学・健康法

人間だれしも飢餓道に陥ることは言い尽くせない耐えがたいことであると思う。シベリア抑留期間、特に初年度は思い出したくないくらいの飢餓に人間性を失ってしまった時代と思っている。一日一日を何とか生き延びようとして罪悪感を超越しての行動が今思うと悲しい。

厳寒のシベリアでは配分されるもの以外で何も口に入れるものはないが、丸太の皮の内側の薄皮を飯盒で長時間煮立てて食べてみたことがあった。また白樺の樹液はよく飲んだが、冬期間は出がわるく、春以降はよく出た。少々甘味のある淡い味だった。

初冬のころ、場所によっては五葉の松の実を拾い集めポリポリとよく食べた。大きさは日本の松かさの十倍くらいで、ヒマワリの実の倍以上でなかなかおいしかった。

二年目くらいの冬期間、もと伐採班用空家バラックの見張り番に一人で行かせられたことがある。一週間に一度下山して食糧補給の上就番していた。別に仕事がないのでもっぱら松の実取りである。数キロも集めて下山、戦友に分けたり、ソ連人にパンやタバコと交換したり実益を得た思い出も懐かしい。

そのころ一度朝戸を開けたら薄く積もった雪に熊の足跡がバラックの周囲に多数残り、恐ろしくなって以降余り遠方までの松の実取りはやめた。時たま二、三人組のソ連人ハンターが私に声をかけてくれたのがうれしかった。

シベリアでは冬からすぐ初夏が来て驚くほど草木の成長が早い。アカザ、シベリア菜、ヨモギと食べられそうな野草は何でも食べた。飯盒いっぱいゆでて青い便の毎日だった。

やがて夏が来ると平原湿地帯で刃の長いロシア鎌での草刈、そして長柄のフォークで集めた干草を数メートルの高さに積み上げ冬に備えるのである。その作業中に見つける貴重な動物蛋白はヘビ、カエルである。

食べきれない分は皮をむいて天日乾燥して後ほど食べたもので、ありがたい御馳走だった。秋がくるとコルホーズにカルトーシカ（馬鈴薯）掘りの作業に出ることもあった。掘り残しが多量にあるので（故意に残す）持ち余るほど持ち帰り、腹いっぱいに食べたものである。また麦は黒パンや馬の飼料となるエン麦のみで、私は穂をもぎ取って皮ごとすり潰して煮立てて、こした汁をスープにして味わったこともある。

入ソ前の収容所時代は、時計、万年筆等と黒パンの交換で、次の抑留中は前述の現地調達などで補充、何とか生き続けることができた。私はまたタバコを吸わなかったので、配給されるマホルカとパンをかえてくれという戦友に交換して食べたこともあって、申しわけない行為をしたことへの気持ちがいまだに残っている。

また健康法として私は、終戦後復員するまで毛布を切り取った腹巻をしていた。シラミの巣になったこともあったが、特に厳冬の保温に大いに役立ったと思う。帰還後は晒木綿を巻いているが、その時よりの習慣が今も続いている。おかげで一度も病気せずにハラショーラボーターになり、後年の一か年くらいはカンボーイの補助役として作業班と現場監督との連絡調整に当たった。

片言のロシア語も覚えて少々の会話の真似をした。監督の中には元政治犯の現地人がおり、教養もあって

よい方たちだったが、共産主義の話になると閉じた口に指を当てて発言を止めたことを思い出す。

二年目、三年目と我々の衣食住環境もよくなってきて、内地の家へ二回ハガキ（赤十字）を出した。（それは家に今もある）返事は受け取らなかったが、戦友に来た返信や日本新聞の記事からして日本国内の事情も察知できた。また順次日本帰還の希望も近づいて心の健康も取り戻すことができた。

民主運動や反軍闘争などにもいろいろと行き過ぎたこともあったと思われる。お互いに日本人同士はもっと同胞愛に燃えて助け合いながら、一人でも多く祖国の土を踏むべきであったと思う。

敗戦という、初めて体験する苦難欠乏の最悪環境下に耐えて幸いに帰ることができた我々として、残る生命のある限り、尊い犠牲となった幾万人もの戦友たちに慰霊の誠を捧げる覚悟である。

昭和二十三年十一月中旬、シベリア抑留より満三年、四度目の冬はありがたい日本の故郷で父母弟妹等と迎えた。そしてお正月を祝うこともできた。入隊までの二年、関東軍入隊より敗戦の一年間、そしてソ連抑留の三年間、私の青春時代の六年間は日本の激変、激動の世相とともに歩んで終わった。

片川　清氏を偲んで

青森県　工藤利雄

思い浮かぶままお話し致します。

時は昭和二十年九月と記憶しております。シベリアの東部、ペトロシーの収容所に居た時です。小さな駅、ホームも無い駅で、街と言っても、家並もまばらな村落という感じ、ここに約一年位いました。仕事は山奥に入り伐採作業を主としてさせられていました。

私の隣に枕を並べて寝起きしていた人、片川清という人は、同郷の青森県出身で、年齢は私より二つ少ない三十歳で、大正六年十月生まれと聞いています。そして身長は一メートル六十八センチ（五尺五寸四分）位で、当時、五尺五寸と言えば大型でした。タバコが